

---

# ふたりはプリキュアCross Stars

リーフェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふたりはプリキュアCross Stars

### 【Nコード】

N4496F

### 【作者名】

リーフェ

### 【あらすじ】

今、地球は原因不明の海の減少、それによる異常気象によって苦しめられていた。そんな時、6人の少年少女と1人の女性は不思議な夢を見る。その夢から、地球を救うための戦いがはじまった！

## 第0話：プロローグ

「すみません雪城さん、こんな時にわざわざ……」

「いいえ。それにね、こんな時だからこそ会いたかったのよ」

198X年、地球は異常事態に見舞われていた。それは海が無くなるという現象だ。

最初は北極海、次に南極海、南大西洋、と続き、今では南太平洋しかのこっていない。

海が無くなっていく中で異常気象が起こり、南太平洋が無くなれば人類滅亡は避けられないだろうと言われている。

「ともかく、今日は泊まっていって下さい。もう会えないかもしれないし……」

「あら、分かりませんよ。もしかしたら明日、何かが起こるかもしれません。希望をなくしてはいけませんよ」

そう言つて、雪城とよばれた腰まで届く黒髪と強い意思がうかがえる黒い瞳の女性は、楕円形のコンパクトのような物を握った。

一方その頃

「もう、どうしようもないのですね」

と悲しそうな少女の声がした。

その声を出したのは、桃色の髪を後ろで団子のようにまとめ、薔薇の花と葉で胸元を隠し、緑色の長いスカートをまとい、貝の上に立ちハート型の飾りを背中に付けた、神秘的な雰囲気少女である。普段から目を閉じているため表情が分かりにくいが、この時ばかりは誰の目にも少女が悲しんでいるのが分かった。

「ええ。時期に『太陽の泉』は消滅するわ。そうなったら残り六つ

の泉も時間の問題ね」

そう答えたのは、茶色の髪をプルシャンブルーの長い布をリボン変わりにしてポニーテールにし、ミッドナイトブルーの瞳を持つ女性である。

「こうなったら、新たな伝説の戦士を探さなければなりませんね」

「けれどもどうするの？精霊と、あの子たちと相性のいい子たちを見つける時間なんて無いわよ」

「ええ。ですから今回は呼び掛けようと思うのです。幸いにも候補者はいますから」

「わかったわ。じゃあよろしくね、フィーリア」

「はい」

『聞こえますか？私の声が聞こえますか？聞こえたら、どうか力を貸して下さい。この世界を、あなた方の望む明日を守るために。お願いします、力を……………』

## 第一話：ありえない！いきなり世界の終わり？

翌朝

『あの夢は、一体……？』

かなり不思議な夢だった。見たことの無い場所に立つ見たことの無い少女が自分に呼び掛けている。そして最後に見えたのは、

「トネリコの森」と呼ばれる山の頂上にある

「大空の樹」。

「どんな意味が分かりませんが、行ってみたら何か分かるかもしれないですね」

そう呟き、女性 雪城さなえ は出掛ける準備を始めた。

準備を終え、玄関に向かうと、

「……さなえさん？」

と、小学生くらいの少年が声をかけた。

彼の名は三島宙明<sup>みしま ひろあき</sup>、この家の主・三島信夫<sup>しのぶ</sup>の第一子である。

「宙明君、どうかしたの？」

「…夢を、見たんです。僕より年上の、女の子が呼び掛ける夢。その後で

「大空の樹」と、女の子がいた場所にいる人たち。六人は知らない人だったけど、その中に、僕とさなえさん、夢の女の子がいたんです」

ゆつくりと夢の内容を思い出しながら話してゆく。

「大空の樹」までは同じ夢だが、それ以降は違う夢のようだ。

しかし、宙明は以前から未来の事を夢で見ていた。恐らく、途中からはその夢だったのだろう。

「どうやら、私たちは同じ夢を見たようですね。これから

「大空の樹」に向かおうと思うのですが、どうします?」

「……行く!」

二人が

「大空の樹」に近づくと、そこにはすでに五人の中学生くらいの少年と少女がいた。

「……………あ」

と、ポツリと宙明が呟いた。どうやら彼らも夢の中にいたメンバーらしい。

更に近づくと、向こうも此方に気付いたらしく目を向けてきた。

「……あの、いきなり失礼ですが、あなたたちもあの夢を?」

「ええ。それを聞くと言うことは、あなたたちも見たのね?」

「……はい」「……」

更に詳しく話をしようとした瞬間、突如怪しい暗雲が立ち込め、  
『ここで最後ですね』  
という、禍々しい声が響いた。

「そこまでよ!!」

その鋭い声は、今まで誰もいなかった

「大空の樹」の側から発せられた。

そちらを振り向くと、そこには膝裏まである長い茶色の髪をプルシヤンブルーの長布でポニーテールにした、ミッドナイトブルーの瞳の女性がいた。

さらに彼女たちの目を引いたのは、女性の纏う服である。

朱色の丈の短い着物を洋服のように改造し、足には朱色のミュール。袖は肘から手首までを覆い、振り袖を連想させる長さである。

そして指部分が露出したグローブ。

まるで

「不思議な力で変身し、悪と戦うヒロイン」を連想させる。

『最後の足掻きですか、キュアフェニックス!』

「ええ。これ以上好きにはさせないわ!」

『戯言を。力をほとんど奪われたあなたに何ができる!!』

「それはどうかしら?！」

その瞬間、キュアフエニックスと呼ばれた女性が手を海の方へと向けた。その瞬間、海とキュアフエニックスが輝き、光が収まるとキュアフエニックスは普通の服装へ あえて違いを述べるなら、ポニールにしていた髪は長布を使い猫の尻尾の用にまとめられ、頭には狐の面をしていることだろう、海は小さな七つの宝石へ変わっていた。

「力がなくなつて、これくらいはできるのよ！」

その叫びに呼応するかのように、宝石はさなえと宙明、五人の中学生の手に収まった。

「フィーリア！」

キュアフエニックスが叫ぶと、待っていたかのように、

「大空の樹」が金色に輝いた。

光が収まると、そこには誰もいなかった。

『…しくじりましたねえ。しかし緑の郷の世界樹の在処<sup>あつか</sup>はわかりました。後は泉の郷へどう行くかを考えましょう』

誰もいなくなった場所で、「青」を失った景色を「大空の樹」だけが眺めていた……。

## 第二話：伝説の戦士！？異世界での説明

辺り一面緑に覆われた中にそびえる巨木。その根本にいた二人の少女が目覚ました。

「……………いたた」

「……ここは、一体……………」

「ああ、全員起きたみたいね」

その言葉に辺りを見回すと、先程現れた女性と、夢に出てきた少女、そして

「大空の樹」に集まっていたメンバーがいた。

「あ、あの……」

「『ここはどこ』とか『どうやってここに』とか聞きたいことはあるでしょうけど、その前に自己紹介しましょう。説明はその後」と、女性は微笑んで言った。

「まず私から。キュアフエニックスこと燎流<sup>かがる</sup>よ」

「世界樹の精霊、フィーリアです」

「雪城 さなえといえます」

「三島<sup>らいが</sup> 宙明です。よろしく」「日向 大介です」

「雷河<sup>らいが</sup> 沙織です」

「美翔<sup>ゆきづき</sup> 弘一郎です」

「雪月<sup>ゆきづき</sup> 可南子です」

「星野 光太です」

「そう。まずは単刀直入に言わせてもらうわ。沙織と可南子に、プリキュアになって、七つの泉の一つ、『太陽の泉』つまり海を取り戻すために戦ってほしいの」

当たり前だが皆それに対し混乱した。一体何を言い出すのだろうか。

「あの、説明のほうがいいのでしょうか？」

「これからするのよ。最初に言い渡せば多少は受け入れやすいかと思っ  
てね」

「そ、そういうものですか？」

「ま、いきなり説明されても意味が分からないだろうからね。…落ち着いたみたいだし、説明するわよ」

「まずここはあなたが住んでいた世界ではない、異世界の一つ『精霊の郷』。複数ある世界はバランスをとって成り立っているわ。ここま  
でいい？」

その言葉に7人は頷いた。

「バランスは滅多なことでは崩れないわ。そのバランスが崩れそうにな  
るという事は、何者かの介入があるという事。そういう時に、それぞれの世界に伝わる伝説の戦士プリキュアに、人間界 あなた達の世界の、十代の少女が変身するの」

「…あ、あの」

「はい、弘一郎くん」

何だか学校のノリである。さなえはこうして勉強していた時の事を思い出した。

「どうして人、それも十代の少女なんですか？」「心の持ち方一つで出せる力は違うし、仲間がいれば何十倍にもなる。それが謙虚なのが人だからよ。で、十代は思春期でしょ。それは一番多感な時期で、異なる力を受け入れやすいの。おまけに女は受け入れる側だから」

その言葉に、フィーリアと宙明以外顔を赤らめた。まさかそういう理由だとは。

「とは言えど、スウィーツ王国のプリキュアのように、年齢や性別関係なくプリキュアにふさわしい心の持ち主であれば変身できるのだけど。まあさっき言ったのは、最もふさわしい条件なの」  
「以外と臨機応変に対応しているようだ。」

「…本当なら、私もプリキュアだから何とかしたいけど、キュアフエニックスの力の根元は『太陽の泉』、つまり海だから力は使えないのよ」

「だ、だからあたし達がプリキュアに？」

「ええ。さっき言った条件に当てはまるのはあなたたちだけだもの（さなえからも不思議な力…多分光の園のものを感ずるけど、そちらはおいおい…かな）」

説明が終わった、と感じたフィーリアは振り返ると

「もう隠れなくてもいいですよ」

と言った。すると二匹の不思議な生き物が現れた。

「いきなりこの子たちに会うとパニックになり説明どころではない、と燎流さんが仰るので隠れてもらいました。さあ、自己紹介して」

「雷の精、ライシエルだライ」

「雪の精、スノシエルでスノ」「名字に『雷』『雪』って入ってるし、ある意味運命的ね。あ、言い忘れたけど私は長年戦ってきたから、変身しなくてもそこそこ戦えるの。だからあなたたちのサポート及びトレーニングをさせてもらっわ」

と言っ燎流の言葉で説明は終了した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4496f/>

---

ふたりはプリキュアCross Stars

2010年10月17日03時03分発行